富山のイノベーター
8

辻隆親 氏
辻四郎ギター工房

「オール富山」の技術と素材でサステナブルな楽器づくり

文・江口絵理　撮影・柴佳安

スギ間伐材でウクレレを作る

急勾配の茅葺き屋根が並ぶ五箇山集落。世界遺産として知られる合掌造りの村からほんの数キロ先の工房で、世界に例のないウクレレを作っている人がいる。

辻隆親さんは、2015年に「辻四郎ギター工房」でギター職人として出発。プロの演奏家やコレクターから厚い信頼を集める父、辻四郎さんの下で研鑽を積むかたわら、19年に海外販路開拓を期してアメリカを訪れ、著名なギター蒐集家に自分たちの製品の印象を尋ねた。

「その時、これほどの技術を持っているのだから、アメリカのギターのコピーに見えるようなギターではなく、もっとオリジナルなものを作ってはどうか、と助言されたんです」

おりしも、日本でのギター製作には別の難題も持ち上がっていた。ギターの音色はボディに使う木材に左右されるが、海外産のローズウッドなどの高級な木材は枯渇が懸念され、入手が難しくなりつつあるのだ。

こうした2つの課題を抱え、隆親さんは地元の商工会へ。すると、富山のプロダクトデザイナーや県の農林水産総合技術センター木材研究所など、多様な分野の専門家との縁が次々に開いた。

なかでもその後を決定づけたのが、木材研究所で開発されていた木材圧縮技術だ。実は、ギターにスギなどの国産材を使いたくても、良い音を出すには柔らか過ぎる。ところが、木材研究所によれば、特殊な技術で圧縮すれば木材の性質を変えることができるという。スギの間伐材を使うことができれば、日本の森林再生にも貢献できるだろう。

富山県生まれ。南砺市役所勤務を経て辻四郎ギター工房へ。開発したウクレレは、一般社団法人日本ウッドデザイン協会（会長・隈研吾）より2021年ウッドデザイン賞を受賞。https://tsuji-shiroh.com/

どのような圧力や温度で圧縮すれば海外の高級木材と同じ音が出せるだろうか――？　隆親さんは富山県立工業大学工学部の音響を専門とする研究者に相談をもちかけ、学生とともに音響試験を実施。最適な圧縮条件を見出した。ただし圧縮機で作れる板の大きさに限界があり、まずはギターではなくウクレレの試作からスタートすることになった。

楽器が「富山の工芸品」に

デザインは富山総合デザインセンターが手がけ、コンパクトでユニークな形に。富山の伝統工芸である高岡銅器や高岡漆器から生まれた技法をふんだんに使い、これまでにないまさに「富山オリジナル」のウクレレを作り上げた。

「サウンドホールに使った『杢目金（もくめがね）』（高岡銅器の技術で作る銅合金）は、音の深みにも貢献していることが音響試験で確かめられました」

木材研究所が開発した人工の杢目も優美で、もはや工芸品として飾っても違和感がないほど。

ウクレレは2021年に発売されたが、隆親さんは今もボディ側面の意匠や圧縮材利用に向けて様々な試行錯誤を続けている。

「新しい道を拓くには、何かこれまでとは違うことに挑戦し続けるしかないと思うんです。もちろん、思うような結果が出ないことも多々あります。でも、そこから別の展開が生まれるかもしれない。仮にそれがウクレレやギターに直接結びつかなくても、富山に貢献できるならうれしい。これまで、富山県や富山の方から積極的に支援してもらってきましたから」

素材も伝統技法も、最新技術もすべて富山産。隆親さんの静かな情熱がつないだ縁が、新たな富山のものづくりを切り拓いていく。